

ブラジル日系俳人増田恆河の連句活動の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065958

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ブラジル日系俳人増田恆河の連句活動の意義

白石 佳和

1 問題の所在

ブラジル移民の俳人増田恆河(1911～2008、1929年12月渡伯)は、1984年にブラジル連句研究会を創立し、晩年近くまで連句活動を行った。また、1993年からはポルトガル語による連句活動も行った。指導者がいないブラジルにおいて独学で連句を学び、百巻以上の作品を残している。俳人であった彼はなぜ俳句だけでなく連句活動を、しかも日本語とポルトガル語で行ったのだろうか。

恆河は1935年、24才のときホトトギス系俳人佐藤念腹に師事し、戦後、念腹主宰の俳句雑誌『木蔭』創刊に参加した。さらに、1987年には、ポルトガル語によるブラジルハイカイのグループ「グレミオ・ハイカイ・イペー」の創立に関わった。恆河はそのグループで、虚子の俳句理念である花鳥諷詠、つまり季語を重視する伝統を伸介する役割(白石2021a)を果たした。彼の俳句活動の方も日本語とポルトガル語に跨っている。これまで彼の日系俳句・ブラジルハイカイと連句の関連については先行研究でもほとんど触れられておらず¹⁾、明らかになっていない。しかし、俳句も連句も中世の連歌・俳諧の系譜に連なる詩型であり、無関係ではありえない。恆河の日系俳句からブラジルハイカイにわたる活動と連句活動には、どのような関わりがあるのだろうか。

本論文では、増田恆河の連句活動の意義とは何か、を考察する。日系ブラジル文学の研究をリードする細川周平は、「文学する」というキーワードを用いて日系文学の活動面に注目する。また日系アメリカ文学の研究者水野真理子も、日系文学の研究では作品だけでなく文芸活動も含めて研究対象とすることを提案している(細川2012:pp.1-35、水野2012:p.10)。それらを受けて筆者は、海外における日本語文学に「座の文学」の系譜が見られ、座の文学のプロトタイプは連句であることを指摘した(白石2021b)。増田恆河の連句活動も、「座の文学」の系譜に連なるのではないと思われる。連句は近代で正岡子規に「連俳(=連句)は文学に非ず」(『芭蕉雑談』1983)と否定されたにもかかわらず、ブラジルの日系文学で連句活動が復活している点は大変興味深い。本稿では「座の文学」という視点から連句活動の意義について考察したい。

日本の俳句雑誌『雪』のバックナンバーの関連記事と『ブラジル連句の歩み』(増田1997)を中心とした資料に拠りながら、日本語による連句活動とポルトガル語による連句活動、それぞれの歴史や概要を整理する。さらに、実作例も挙げながら、連句活動そのものの意義だけでなく、ブラジル国際ハイクあるいは世界のハイク・連句全体の中での連句活動の位置づけを検討する。

執筆者紹介

- 猪瀬 千尋 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系准教授
中野 顕正 弘前大学人文社会科学部助教
畑中 榮 金沢高等学校講師・石川県漢詩連盟理事
大学院第4回修了
孫 媛 金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程
日比 嘉高 名古屋大学大学院文学研究科教授・第43回卒業
村戸 弥生 石川工業高等専門学校・金沢美術工芸大学非常勤講師
第32回卒業・大学院第4回修了・社会環境科学研究科第2回修了
白石 佳和 高岡法科大学法学部准教授
金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程

彙報

会員著作紹介

※著作の刊行がございましたら、ご一報ください。

猪瀬千尋『中世王権の音楽と儀礼』
(二〇一八年二月刊、四三八頁、笠間書院、八五〇〇円＋税)

二〇二〇年一〇月に本学に着任された猪瀬千尋氏の『中世王権の音楽と儀礼』は、二〇一三年に名古屋大学へ提出した博士学位論文を元に多くの新稿を加えて成る大著である。刊行後すぐに大きな話題となり、「第四回中村元東方学術奨励賞」「第一回説話文学会賞」「第十二回日本古典文学術賞」受賞という高い評価を獲得した。

本書は、日本史学の王権論を理論的背景として、中世王権において音楽が果たした役割について考察している。これによって、中世における「音楽」を単なる遊芸ではなく、有職故実等に裏打ちされた、高度な政治性・権力性を有するものとして捉え直した点において画期的な著書である。

具体的な内容については、「序章」にある以下の記述によって著者ご自身より明瞭に語られている。すなわち、

本書は〔中略〕音楽が持つ特質を、権力性・身体性・宗教性

2 日本語による連句活動

まず、日本語による連句活動を時系列に沿って叙述する。参考資料は、俳句雑誌『雪』とブラジル連句の歴史などの概要と連句作品を集めた『ブラジル連句の歩み』²である。『雪』は新潟県で1977年10月に創刊された『ホトギス』系俳句雑誌である。『ホトギス』で活躍した4Sの一人、高野素十主宰の俳誌『芹』(1957～1976)と中田みずほ主宰の俳誌『まはぎ』(1929～1975)がそれぞれ主宰の逝去とともに終刊となり、その二誌の同人を引き継ぐ形で成立したのがこの『雪』(主宰:村松紅花)である。恆河の師であった佐藤念腹は新潟県出身で、ブラジルに移住する前に高野素十・中田みずほと親交があった。その関係でブラジルの念腹の弟子たちが『芹』『まはぎ』に度々投句していたため、『雪』にもブラジル日系人の俳人の同人が大勢引き継がれていた。恆河もその一人である。次に『ブラジル連句の歩み』の書誌情報を説明する。『ブラジル連句の歩み』の前半部分は1988年4月12日脱稿し日本の村松紅花に送られ、『雪』1988年10月号から7回にわたって連載された。³その原稿に連句作品約百巻⁴を加えて書籍としてサンパウロで刊行したのが1997年である。⁵『雪』には「ブラジル連句の歩み」以外のブラジル連句関連資料として、1983年から2004年の間に、ブラジル連句の作品約50巻、連句の鑑賞文、ブラジル連句の活動の報告記事などが掲載されている。本章では、これらの資料を基に、以下増田恆河の日本語による連句活動の歴史と概要を説明する。

2.1 連句活動開始の経緯

増田恆河が連句に関心を抱いたのは、『ホトギス』45巻第1号(1942年1月)に掲載された半歌仙『菊の巻』(高浜虚子捌き)を読んでからである。当時恆河は『ホトギス』に投句していた関係で、この記事を目にしたと思われる。その後、40年ほど連句活動は行っていなかったが、1982年1月、鈴木梯一(1911～1996、サンパウロ大学教授)より山田孝雄『連歌概説』をテキストとした講義を梶本北民とともに受けた。その講義をきっかけに、いくつかの入門書を二人で勉強し、実作を行った。連句試作第一号が「山荘の」の巻である。この歌仙は、1983年1月の日伯毎日新聞新年特集号(発行:サンパウロ市)に「老いらくの恋ーブラジルの連句事始」(増田恆河記)という記事とともに掲載された。連句の楽しさを「ホ句の仲間(筆者注:ブラジル日系俳句の俳人たち)に紹介して同好者をつり大いに発展させたい」(増田1997:p.2)と期待してのことである。さらに、1983年10月にも、日伯毎日新聞に別の歌仙と文章が掲載された。

その後、増田恆河とともに連句活動の中心にあった梶本北民が1984年6月に亡くなる。「連句の勉強をつづけてくれ、ブラジル季題はもっと研究しなければならない」(増田1997:p.124)と繰り返し言う梶本北民を慰めるため、恆河は北民が亡くなる直前の5月、「ブラジル連句研究会」を発足する。発起人は、梶本北民、吉川耕花、千本木涙子、千本木早苗、栗原義人堂、鈴木梯一、恆河の7名である。北民の死後も研究会は継続し、月2回のペースで連句会が行われた。以上が、増田恆河の連句活動始動の経緯である。

次に、増田恆河の連句活動の開始を日本の俳誌『雪』および『雪』主宰村松紅花との関わりから眺めてみたい。増田恆河は『ブラジルの連句の歩み』の冒頭とあとがきに、連句に

ついて教示を受けた一人として村松紅花の名前を挙げ、感謝の念を表明している。恆河と北民の初めての歌仙「山荘の」の巻は村松紅花に送られ添削を受けた。恆河によれば、「指導者がいないブラジルではすべて手さぐりで、この添削こそ唯一無二の指標となった」(増田1997:p.3)という。さらに紅花は、井本農一・今泉準一著『連句読本』を恆河たちに寄贈した。紅花の直接の指導と参考書の寄贈が恆河たちのブラジル連句活動の励みになったことは容易に想像できる。

さらに紅花は、俳誌『雪』にブラジル連句を掲載した。「山荘の」の巻は、『雪』66号(1983年3月)に「ブラジル連句」と題して掲載された。続いて75号(1983年12月)には「わたりくる」「風狂の」の巻が掲載された。これらの連句は恆河が『雪』への掲載を希望した投稿ではなく、添削を希望して紅花へ送った私信としての連句作品が、紅花の判断で『雪』に掲載されたのではないと思われる。77号(1984年2月)の「後記」(安田充年記)には、「ブラジルには俳句だけでなく、連句もされる方々がおられるようであります。本誌にはその作品が既に幾つか載っておりますが、編集子は不明にして連句の詳しいことが判りません。今までのブラジル歌仙についてどなたかご批評などお寄せ頂ければ幸甚に存じます」(『雪』77:p.97)とあり、紅花の一存で連句が掲載されていた可能性が高い。一般的に俳句雑誌に連句が載ることは例がないわけではないが、少なくともこれまで『雪』では掲載されていなかった。にもかかわらずわざわざブラジルの連句に紙面を割くのは、紅花の強い意図が働いているとみて間違いない。

『雪』77号の後記の問いかけに応じて、『雪』81号(1984年6月)では、歌仙「春たけて」のあとに増田恆河の村松紅花宛手紙の文面が紹介されている。そこには、「「古人鑽仰」を読ませて頂きまして、私どもは連句をはじめました」(『雪』81:p.97)とある。「古人鑽仰」とは、『雪』の前身の一つである高野素十の俳句雑誌『芹』に連載されていた、村松紅花による連歌論・俳論の解説記事である。そこでは、二条良基や心敬の連歌論、芭蕉の書簡などが紹介されている。連載をまとめた単行本が1982年に出版されていることを考えると、恆河が連句を始めきっかけとして「古人鑽仰」の影響もあったと思われる。とにかく、恆河の手紙によって、『雪』の同人に「ブラジル連句」が掲載されている背景が理解されたであろう。

ブラジル連句に呼応するかのようには、日本での『雪』同人の連句もブラジル連句と並んで掲載される回があった(83、87号)。また、『雪』99号(1985年12月)には、『雪』同人谷地海紅氏⁶による歌仙「女鞆」の巻の連句評論が掲載された。付合や転じのおもしろさを指摘するだけでなく、俳人による連衆の作ゆえの一句の独立した詩情の美しさも評価し、「名残のウラをかるやかに捌かれた増田恆河さんに敬服しつつ、海を越えてくる次の歌仙を心待ちにしたいと思います」(『雪』99:p.114)と締め括っている。ブラジル連句に刺激される形で『雪』の日本人同人の連句活動も活発になっているのである。

増田恆河の連句活動が村松紅花および『雪』の「伴走」に支えられてきた一面は否めない。ブラジル連句研究会の連衆の多くは『雪』の同人でもあった。村松紅花の添削や、ブラジル連句の『雪』掲載が連衆の励みとなったに違いない。

2.2 連句活動の概要

現在『雪』および『ブラジル連句の歩み』で確認できる作品数は、『雪』47巻、『ブラジル連句の歩み』104巻、重なりのある21巻を除くと、計130巻である⁷。1984年6月6日に始まったブラジル連句研究会は、月2～3回行われ、1996年12月までに438回、百数十歌仙を巻いたとあり(増田1997:p.13)、確認できた作品数とおおよそ一致する。一つの歌仙を巻くのに3、4回の会合を要した計算になる。

『雪』142号(1989年7月)には、「ブラジル連句会研究会第百回記念興行」と題する増田恆河の一文が載る。その記事によると、研究会の第80回を節目に「ブラジル連句の歩み」がまとめられ『雪』に掲載された後、この第百回(1988年12月21日)に記念興行を行うことになり、式目(連句のルール)を部分的に緩めた「臨時式目」が発表された。この日巻いたのは、「それぞれに」の巻である。発句は、「それぞれに謂れの調度夏館」⁸と夏の季節⁹から始まる。当日に加えて別日に続きを行い、二日かかって完成したらしい。次に掲げるのは、第百回記念興行歌仙「それぞれに」の巻、名残の裏の六句である。

- | | | |
|----|----------------|----|
| 31 | 汗の玉はつきりとして大写し | 早苗 |
| 32 | ベレーの技にスタンドの沸く | えみ |
| 33 | 電燈のちらほら点りはじめける | 和栄 |
| 34 | 東洋街を行きつ戻りつ | 喜美 |
| 35 | コロニアの願いかないて花万朶 | 涙子 |
| 36 | 胡蝶も飛ばぬ午のねぶたさ | 執筆 |

29に「セラード」(ブラジル中央部のサバンナ地域に見られる植生。イネ科の草本による草原が広がる。)、30に「大統領」が出てきたブラジルの流れをそのまま引き継ぎ、「ベレー」、「東洋街」の句が続く。サッカー選手の名は日本では「ペレ」と二拍だが、コロニア語では「ベレー」と長音が加わり拍が増えている。ブラジル日系人がカフェを「カフェー」とのぼして発音するのをよく耳にするが、それと同じ現象である。35は花の句だが、この場合、前句と合わせて解釈するとブラジルを詠んだ句となり、「花」は黄イペー(ブラジルの国花)を指す。(ただし、「コロニアの願い」が「ブラジルの地に桜を」という解釈をすれば、「花」が桜を指す可能性も残る。)

ブラジル連句研究会の連衆の第一回からの主なメンバーは、千本木涙子、千本木早苗、成田サビア(知子)、増田恆河の4名である。130巻のうち、参加回数が多いのは、全部に参加した増田恆河を除くと、香山和栄が85回、成田サビアが72回でこの二人が突出している。この二人は、増田恆河との両吟の回数が多い。続くのが市脇千香(27回)、千本木早苗(24回)、千本木涙子(21回)である。梶本北民の妻つるえも18回と多い。恆河宅の他、千本木涙子・早苗(夫婦)宅、つるえ宅が連句会場であった。

2.3 ブラジル連句の特徴—季語

ブラジル連句の特徴としては、まず季語の扱いが挙げられる。恆河は、「連句に用いられる季語は、ブラジルの季語と日本の季語を併用する」(増田1997:p.11)とし、日本の歳時記とブラジルの歳時記を使う。例えば、「四月馬鹿」は、日本では春、ブラジルでは秋となるが、

付句によって春、秋を使い分ける。『ブラジル連句の歩み』に次のような付合がある。

- | | |
|----|--------------------------------|
| 24 | ゴヤバ選る娘らバレーひたすら |
| 25 | 月更けて浮かれ狸の腹鼓 |
| 26 | 今日万愚節今日万愚節(増田1997:p.46「秋草の」の巻) |

24「ゴヤバ」は果物の「グァバ」のこと。⁹ブラジル歳時記(『自然諷詠』)では秋の季語である。25は秋の月、26の「万愚節」はブラジル季語に従い、秋の季語として使われている。打越(前々句、ここでは24句目のこと)からのブラジルの流れから「万愚節」をブラジル季語として扱い、春ではなく秋の季語としたのである。

花の座の「花」は、その句がブラジルのものであれば黄イペーを表し、日本のものであれば桜を表す。たとえば、

- | | |
|----|-----------------------------------|
| 17 | はるけしやゴヤス路はいま花盛り |
| 35 | ノイバーダ祝うバイレや花の下(増田1997:p.22「囀や」の巻) |

この二句の「花」はどちらもイペーを表象する。17の「ゴヤス」には「ブラジル国の州名、中央高原、黄イペー(ブラジル国花)の群落が多い」と注があるので黄イペーであることは明らかである。35のノイバーダは「婚約」、バイレは「舞踏会」の意味を表すコロニア語(日本語とポルトガル語のビジン)である。ルールからいえばブラジルの句であるので「花」は桜でなくイペーを表すと考えてよいだろう。増田恆河編日本語歳時記『自然諷詠』(1995)には「花」の項の最後に「ブラジル連句では「黄イペー」を桜花とともに「花」として詠む」と記述されている。

2.4 日本の連句大会参加

ブラジル連句の活動で特筆すべきは、日本の連句大会に応募しつづけていたことである。これまで作品の講評を得る機会が村松紅花からのみであったので1991年から1996年まで毎年「国民文化祭」に作品を送った旨が書かれている(増田1997:p.13)。「国民文化祭」とは演劇、芸術作品、文芸作品などを発表する文化の祭典であり、毎年持ち回りで各都道府県が開催する「文化の国体」である。平成二年(1990)愛媛開催時より連句大会が加わった。増田恆河たちのブラジル連句は1991年千葉大会から参加し、1995年とちぎ大会では半歌仙「このあたり」の巻が国民文化祭実行委員会賞を受けた他に一卷入選、1996年富山大会では二巻が入選した。1998年大分大会でも「親しさや」の巻が第13回国民文化祭大分県実行委員会会長賞を受賞、他三作品が入選している。これらの活動より、日本の連句大会がブラジル連句研究会にとって目標の一つとなっていたことがわかる。

千葉大会など最初の頃入選できなかった理由として増田は「発句は起首(連句を巻き始めた月日)に季を合わせなければならないが、ブラジルの季節が日本と反対であることを表明しなかったので落選したようだ」(増田1997:p.13)と述べている。その点については、注を付けることで解決できたらしい。「このあたり」の巻は、『第10回国民文化祭・とちぎ95「文芸祭・連句大会」入選作品集』には「注=猩々木(ブラジル季語冬) 椰子の月(ブラジル季語夏) ©ブラジルの三月は秋季」という注がついている。季語についての注と発句についての注がつくことによって、日本の連句大会の選者はブラジル独自の事情を理解しただろう。一方、『ブ

ラジル連句の歩み』には注がない。

日本の読者のことを考えると、ブラジル特有の季語（ブラジル季語）やコロニア語と呼ばれるカタカナ語には注が必要である。日本の『雪』に掲載されたブラジル連句には注が多い。『雪』にのみ掲載されている梶本北民との両吟歌仙はどれも注が複数あり、多いものでは十七の注がある。「サンバ」は日本人にもわかるが、「バイレ（舞踏会）」はわからない。「ネグロ（黒人）」「コロノ（農場契約労働者）」「バトロン（農場主）」などのコロニア語、「セー広場（サンパウロ市の中心にある広場）」「パンタナール（熱帯性湿地）」「コルコバード（リオデジャネイロ市の丘）」などの地名に注がつけられている。『ブラジル連句の歩み』の連句作品集の1985～6年の作品は『雪』からの転載のため注が多いが、それ以後の作品には注がほとんどない。これは、『ブラジル連句の歩み』がサンパウロで発行されたものであり、ブラジルの読者を想定しているためであろう。先に触れた「このあたり」の巻の場合、日本で刊行された国民文化祭の作品集には注があるが、『ブラジル連句の歩み』では注がない。日本人の知らないブラジルの世界を詠むところにブラジル連句の特徴があり¹⁰、だからこそ日本の読者に注が必要となるのである。

実際に連句の中でどのようにブラジルと日本が描かれるのか、その特徴をみてみよう。少し長い引用になるが、連句作品の一つ例に挙げる。

半歌仙「箒目を」の巻	サンパウロ	増田恆河 捌
箒目を立てしお庭に巢立鳥		香山 和栄
雨雲消えてふらここの影		増田 恆河
遠山も真近きダムもうららかに		成田サビア
バスは走るよ婦心矢のごと		梶本つるえ
初孫が生まれた報せ椰子の月		河
夏の館に揚がる歓声		栄
達磨の眼いれて当選祝うなり		ア
闘志また湧く医博課程へ		え
久々に同期の友と炬燵して		河
抱擁しばし夢じゃないかと		え
恋の邪魔して命までとりしとは		栄
君住むりオへ秋空を飛ぶ		河
金色に大イエス像照らす望		ア
カメラのボタン響き爽やか		栄
世界一長き吊橋完成し		え
不景気風はどこを吹くやら		ア
顔役とボスと議員が花見酒		河
舞妓言葉の実（げ）にも暖か		え

平成9（1997）年11月6日首 同10年4月10日尾 於サンパウロ市梶本居

オモテの発句から4句目までは、日本ともブラジルともとれる世界である。5句目の「椰子の月」はブラジル季語であり、ブラジルの世界に移る。ウラの折立（7句目）の選挙の達磨は日本の

文化を感じさせる句であるがブラジルの世界ともとれそうだ。8～11句目は日本ともブラジルともとれる世界がまた続き、12、13句目はリオデジャネイロの景、15句目の「世界一長き吊橋」は1998年に竣工した明石海峡大橋、拳句は「舞妓」で締め括る。

ブラジルと日本を自在に往還する世界は何を意味するのだろうか。彼らにとって自分が住んでいるブラジルを詠んだ句は日本の連句の海外詠と同一視できない。かといって日本を詠んだ句が日系移民から見た海外詠になるわけでもない。ブラジルと日本を往還するというより、日本をルーツに持つ共同体の中でブラジルと日本の境界はなくなっている。連衆（連句会の参加者）は連句という詩の対話の中で、日本語表現をアイデンティティの葛藤ではなくアイデンティティのジャムセッションとして楽しんでいる。

このような世界を成立させている大きな要因の一つは、連句の詩型、システムにある。連句は「転じ」を何よりも重視する。「転じ」とは、一言で言えば変化することである。半歌仙「箒目を」の巻を例に説明すると、5句目「初孫の～」の句に対し、その喜びの様子を6句目で付ける。つまり、5句目と6句目で初孫が生まれて喜ぶ家族の世界がある。それに対し7句目は、5・6句目の延長上の世界ではなく、夏館で歓声をあげたのは選挙の当選だった、と別の世界へ変化する。これが転じである。連句の式目には「去嫌」と呼ばれる、同趣向のもの（山川、地名、神祇釈教、懐旧など）を詠む場合は何句か離すという細かいルールがあるが、それらもすべて「転じ」のためのルールである。正岡子規が前掲『芭蕉雑談』で連句が文学ではない、と批判したのはまさにこの点である。連句は「変化」を貫き終始一貫した秩序・統一感がない点を「文学に非ず」と断っている。しかしブラジル連句では、その点が移民の表現世界を拡張している。いわゆる「文学」であれば複数の国や言語、文化の間で自身のルーツを問うアイデンティティのゆらぎが、個人の葛藤などの形で表現される。一方連句では、複数の人々の声となることで、ブラジルの世界、ブラジルでの日本の生活、新聞などから得た日本の様子、過去の日本の記憶など、自在に連想して詩が紡がれていく。時間や空間、文化や言語も越境する。文学でも移民文学を「トランスランゲージング」の概念を使って分析する論（日比 2021）があるが、ブラジルの文化と日本の文化が混ざり合い、日本語と「バイレ」「カフェー」のようなコロニア語が飛び交う連句は、作品というより言語生成のプロセスを味わう点を含めトランスランゲージングでありトランスカルチュラルリングな世界を描いている。連衆は詩の対話によってお互いの存在を承認し合っているように思える。

この半歌仙作品には注がなかった。ブラジル連句研究会では、日本の国民文化祭を目指すようになったことで日系人の句座だけでなく、自分たちの作品を評価する日本人たちも含めた座を意識した可能性がある。日本語で日本の世界へ拡張する活動であったため、日系二世やブラジル人への広がりが見られなかったのかもしれない。増田恆河はだからこそ、俳句と同様ブラジルへ視点を向けたポルトガル語連句を始めたのではなかろうか。

2.5 ブラジル連句のその後とまとめ

ブラジル連句の活動はその後どうなったのだろうか。『ブラジル連句の歩み』の連句作品での最後の作品は、半歌仙「冬晴れや」の巻（増田1997:p.118、1997年6月2日首尾）で、本著唯一の独吟である。これは、『雪』250号（1998年7月）にも掲載されている。この作品

以後、『雪』に掲載された連句は、一つを除き¹¹すべて独吟である。『雪』253号(1998年10月)掲載の紅花宛手紙(恆河 1998年3月30日付)によれば、ミナス州への転居が決まり責任ある仕事をすべて打ち切った、とある。実際に転居したのは1998年11月である。それゆえ、1998年以降の連句作品は、車中で作ったものなど恆河の独吟であった。『雪』に掲載された最後の連句作品は、2003年9月24日の半歌仙「春眠や」の巻である。つまり、『ブラジル連句の歩み』出版の翌年には、増田恆河がサンパウロ市から退去したため、ブラジル連句研究会も引退せざるを得ず、独吟によって晩年まで連句活動を続けていたのではないかと思われる。ブラジル連句研究会では司会進行の役割である捌きをすべて増田恆河が担当しており、会のメンバーも高齢化していた。¹² 増田恆河が抜けたあと、残されたメンバーでの研究会の存続は難しかったようだ。

以上、ブラジルの連句活動について、始まりの経緯、日本の俳誌『雪』および村松紅花との関わり、連句作品の概要をまとめてきた。ブラジル連句は指導者不在の中、増田恆河が梶本北民の遺志を継ぐ形で中心となって15年以上続けられた。『雪』や村松紅花に支えられながら、日本の連句大会で二度も受賞するほどに連句が進歩した。『ブラジル連句の歩み』というブラジル連句の入門書および作品集も刊行した。俳誌『雪』や国民文化祭の連句大会などの日本との関わりは、ブラジル連句研究会にとって励みになったと思われるが、増田恆河が去った後、会が存続しなかったのは残念である。

3 ポルトガル語による連句活動

1節で触れたように、ブラジル日系俳句で活動していた増田恆河は1987年からポルトガル語のハイカイグループ「グレミオ・ハイカイ・イペー(イペーハイカイ同好会)」¹³の活動に参加するようになり、ブラジルハイカイに季語のある伝統俳句を根付かせようと努力した人物(白石2021a)でもある。ポルトガル語連句は、このグレミオ・ハイカイ・イペーの活動の延長線上から1993年に始まった。この団体は、「万華鏡ハイカイグループ(GRUPO HAICAI CALIDOSCÓPIO)」と呼ばれている。ポルトガル語連句について参照した資料は、増田秀一(恆河)「ブラジルにおけるハイカイの近況」(『俳句文学館紀要』8, 1994)、俳句雑誌『雪』、ポルトガル語歳時記『NATUREZA -BERÇO DO HAICAI』(Masuda, Oda1995)である。

恆河はグレミオ・ハイカイ・イペーで季題の研究や題詠句会をメンバーと行っていたが、恆河曰く「連句に関する鈴木論文¹⁴をはじめ英、仏、スペイン語などの文献により知識を得ているイペー・ハイカイ同好会のメンバーは連句に対する好奇心が旺盛」(増田1994)だったので、1993年の4、5、6月例会に恆河が連句の簡単な解説を行った。その後、8月6日に雑誌『ポルタル』の編集長フランシスコ半田と恆河がポルトガル語で発句・脇・第三を作った。これがブラジルのポルトガル語連句の始まりである。

FOLHAS DE SERINGA / MANHÃ DE INVERNO INVADEM / JANELA DO AMIGO

(ゴムの葉や冬の朝の窓に散る フランシスコ)

TOMEMOS O CHIMARÃO / ã BEIRA DA LAREIRA

(壁炉を囲みシマロン(注 お茶の一種)を召せ 恆河)

GATO QUE PASSA / SE AQUECE ENTRE AS PERNAS / ESTICANDO A ESPINHA

(暖をとる猫脚の間に背伸びして フランシスコ) (増田1994)

『雪』205号(1994年10月)には、1993年8月22日から12月5日にかけて計5回の会合において歌仙“VENTO FRIO”(寒風の巻)を満尾した記事がある。メンバーは5名とあるが、名前が明らかなのは恆河、テルコ・オダ、エウニセ・アルーダ(ブラジル作家連盟理事長)の3名である。式目は「一、前句と付句は発句と脇のように環境、感覚、発想などが其の関係を保つこと。二、前句と付句のように、直接連係している場合のほか如何なる類似も許されない。三、一卷三十六句による歌仙形式においては二花(イペーも花と見做す)三月(三ヶ所に月の句を詠む)の句を必要とし、恋の句若干が要求され、捌手の指示にしたがって進められる」の三か条である。このシンプルな式目のおかげで楽しい雰囲気醸成されたとのことである。ポルトガル語を意訳(増田恆河)した付合を引用すると、

東の間をブラジルサッカーのテレビ見て

悲喜ないまぜてついに泣き出す

遙かなる国の高山月仰ぐ

(『雪』205号(1994年10月))

完全な形で公表されていないので、作者や句の位置などはわからない。「月仰ぐ」とあるので、この句が月の座であることはわかる。

次の連句は歌仙「UM OUTONO QUENTE(秋暑し)」の巻である。1994年3月20日に始め10月1日に満尾したことから、毎月1回計7回連句会が行われたらしい。この歌仙は『NATUREZA -BERÇO DO HAICAI』に掲載されている。連衆は、Goga(増田恆河)、Teruko(テルコ・オダ)、Franchetti(パウロ・フランケッチ)、Francisco(フランシスコ半田)、Zuleika、Hazel(ハゼール・フランシスコ)、Edson(井浦エジソン)、Izo、Douglas(ドグラス・プロット)、Fanny(ファニー・ツブレ)、Alberto(アルベルト・村田)、Estela(エステラ・ボニニ)、Clícieの十三名である。

経歴が分かる人のみ簡単に紹介する。テルコ・オダは増田恆河の姪でグレミオ・ハイカイ・イペー所属の俳人である。「秋暑し」の歌仙はテルコ・オダ宅で行われた。増田恆河の死後、グレミオの中心的な役割を果たす。パウロ・フランケッチは2015年までカンピーナス大学教授でハイカイを専門とし、グレミオ・ハイカイ・イペーにも参加している。フランシスコ半田は当時日本文化紹介雑誌『PORTAL(鳥居)』の編集長で、グレミオ・ハイカイ・イペーの創立に関わっている。ハゼール・フランシスコはエスペラント語協会の会員で、増田恆河はハゼールからエスペラント語を学んでいた。井浦エジソンもグレミオ・ハイカイ・イペーの初期からのメンバーで、彼の祖父と増田恆河は俳句仲間だった。ドグラス・プロットはニテロイ(リオデジャネイロの対岸の町)から参加¹⁵していた俳句好きである。ファニー・ツブレは1949年に最初の句集を出している大ベテランの女性俳人で、グレミオ・ハイカイ・イペーのメンバーである。『雪』214号には、阪神大震災の折、ツブレが恆河に義捐金を送ったという恆河の記事が掲載され

ている。

この歌仙を巻いた「万華鏡ハイカイグループ」のメンバーは、経歴の分かる人はすべてグレミオ・ハイカイ・イペーのメンバーと重なっている。また、十三名のうち半数以上が非日系（日本ルーツを持たない）ブラジル人であり、日系人ばかりではない点は注目すべきである。

1996年3月2日に行われた第10回ハイカイ集会では、ハイカイ・コンテストのあと、テルコ・オダ大会委員から歌仙「秋暑し」の巻のコピーが参加者に配布され、連句の解説が行われた。グレミオ・ハイカイ・イペーのグループが連句の普及も行っていたことがうかがえる。

その後、『雪』における「万華鏡ハイカイグループ」の活動報告は、1998年と2001年に一回ずつ見える。2.5で触れたように、恆河は1998年にサンパウロ市からミナス州に転居し隠棲生活を送った。恆河隠居後の日本語連句会の存続は情報が無いが、2001年の報告によるとポルトガル語連句会は恆河がいなくなってからも毎月の例会を行っていたようである。

『NATUREZA -BERÇO DO HAICAI』は季語解説(Kigologia)と例句(Antologia)から成るポルトガル語歳時記であるが、巻末の付録の一つに連句についての簡潔な説明が掲載されている。その内容を以下紹介したい。

「一概要」には、三月二花の定座や「発句」「脇」「第三」「挙句」などの句の名前、序破急の構成などが説明されている。序破急はそれぞれポルトガル語で suave (適度な)、vivaz (活発な)、ligeiro (軽い) と工夫して訳されている。「二実践」では、捌き手の役割と、句と句の繋がり方、別の言い方をすれば「転じ」について説明している。恆河は、前々句(=打越)と類似の関係になってはならないことを、図を用いるなどしながら強く説いている。さらに恆河は、日本語連句で開発した「新自他場論」¹⁶を援用し、各句を P = 人情あり、NP = 人情なし、A = 自、B = 他、AB = 自他半、X = 動物、花、物、Y = 景色、などと分類する記号を図で説明する。打越や自他場の説明に紙幅を割いているのは、連句のルールで初心者に理解しにくい点を「転じ」のルールと見定めてのことだと思われる。「結論」部では、連句は日本で人気があるが、俳句と比べ複雑で人気に乏しい、など、俳句と連句の比較が述べられている。また、連句の特徴として、明確な結末を持たず連鎖によって作られる常に新しい関係におもしろさがある、と指摘し、連句の本質は参加者(連衆)によって形成される調和的な雰囲気である、と結論づける。また恆河が、「子規が西洋の個人主義の影響を受け連句を芸術と認めなかったのに対し、高浜虚子が連句を守った」と述べる点は、日本の近現代連句史にはあまり見られない論点である。最後に、ポルトガル語歌仙「秋暑し」の巻が全句掲載してある。

万華鏡ハイカイグループは、式目や作品、『雪』の記事などから判断すると、非常に式目に厳しい座であったようだ。グレミオ・ハイカイ・イペーが季語のある伝統俳句を継承したように、連句でも式目を守ることを重視していた。恆河が日本語による連句で培った経験が生かされている。連句はもともと座を楽しむのが目的で、芭蕉の「文台おろせばすなわち反故なり」(『三冊子』)の言葉もあるように、作品を残すのが本来の目的ではない。ポルトガル語の連句作品がほとんど残っていないのは残念である。しかしながら、日本語連句のように日本の連句大会への応募などの目標がない中で少なくとも八年間活動したことには大きな価値があると言える。グレミオ・ハイカイ・イペーのメンバーとはほぼ重なり、また伝統を重視する方向性も類似する。ブラジルハイカイと深く関わる形で万華鏡ハイカイグループが活動していたのは確かである。

4 ブラジル連句の活動の意義

村松紅花が俳句雑誌『雪』の中で増田恆河のブラジルでの功績を讃えた記事は三点ある。一つ目は「目をみはるブラジル人のハイカイ熱」(201号、1994年6月)、二つ目は「文化の発信—増田恆河さんの功績—」(213号、1995年6月)、三つ目は「増田恆河氏の健闘を讃える」(253号、1998年10月)である。これらを通して紅花が評価したのはブラジルにおける「ハイカイ熱」の高まり、つまり日本移民の日本語俳句ではなくブラジル人によるポルトガル語の俳句を増田恆河がブラジルで広めた点である。「目をみはるブラジル人のハイカイ熱」では次のように述べる。

(中略) ブラジル人の間にハイカイ(ハイクのこと)熱が高まっていることは、増田恆河さんのお便りであきらかである。それも、どうやら増田恆河さんが火つけ役であり、且つ推進役であり、指導者である。

日本人で、その住む国の言語に上達する人はたくさんあるが、そういう人の多くは、現地の文化に溶けこむことに熱心のあまり、日本の文化についての教養が薄くなりがちである。恆河さんはその点では稀有の人材である。(『雪』201p.142)

つまり、ポルトガル語に堪能で且つ日本文化の教養も深い恆河がブラジルにポルトガル語のハイカイをはやらせたことを評価している。日系移民も次の二世の世代になると、ポルトガル語しか話せず現地文化に溶け込み日本文化をあまり継承していないケースが多かった。俳句における増田恆河の仲介行為は、日本語とポルトガル語だけでなく移民一世と二世の世代を仲介した点で稀な例である。「文化の発信—増田恆河さんの功績—」では、日本が工業製品の輸出だけでなく日本文化を輸出しているとして、次のように述べている。

ブラジルに渡った日本人の多くが俳句を作り俳句雑誌も発行されているが、それは日本人同志の中のことでブラジル人には直接の影響はない。日本語という厚い壁のためである。その中でポルトガル語に堪能な増田恆河さんがブラジル人に俳句を指導し、俳人(ハイカイク)を養成していることは喜ばしい。恆河さんはさらにブラジル人に連句を指導し、このごろその連句会の写真を送って来てくれた。黒人系、白人系、日系のブラジル人が、熱心にポルトガル語で連句の付句を案じている写真を見て、私は強い感動を覚える。

芭蕉は日本では俳句作者と思われているが実は彼は生涯に駄作まで含めても俳句は千句も作っていない。芭蕉は本来連句作者であり、連句指導者であった。連句は俳句以上に日本独自の芸術であり、それ故に却って世界性を持っているとも言える。

今こうしてブラジルの一角で数人で始まっている横文字連句は日本文化発信の貴重な第一歩である。(『雪』213p.117)

紅花はブラジルのポルトガル語ハイカイだけでなくポルトガル語連句の活動に感動し高く評価していることがわかる。もともと近世の「俳諧」は発句(現代でいう「俳句」)と連句両方をさす言葉である。近世文学研究者の視点から、俳句を深く理解し「俳諧」に遡って日本文化で

ある「ハイカイ」をブラジルに伝えた恆河の功績を讃えたのだと言えるだろう。2.4で指摘したように、連句は混ざり合う言語や文化を即興的な詩の対話で表現する。ポルトガル語であるにもかかわらず連句の式目を守り季語を用いることは日本の文化を引き継ぐことである。それと同時にポルトガル語で表現する世界はブラジルの世界である。そこには日系文化も含まれるが、それを懐かしいと受け取り付句する日系二世もいれば、オリエンタルな視点で解釈し創作する非日系ブラジル人もいる。トランスカルチュラルな世界を共同体(=座)の中で紡ぎ出していく。これが村松のいう連句の「世界性」ではないだろうか。

『ブラジル連句の歩み』で恆河は、連句の魅力として「俳句会では味わえない素晴らしい“座の文芸”」(増田1997:p.2)を挙げている。「座の文芸」とは、一座をともにして楽しむ共同制作の文芸・文学のことである(白石2021b)。恆河は連句について「付句をする度に味わう苦勞と歓喜は格別」(増田1997:p.4)と述べている。これは、紅花が評価した「俳諧」に通じる。

『雪』215・216号(1995年8・9月)には、グレミオ・ハイカイ・イペーのメンバーで吟行と月見句会を行なった記事が掲載されている。月見句会では、午後に連句を巻き、夜月見を行なったことである。ポルトガル語のハイカイ・レンクにおいてもグループ共同で文芸活動を行い、「座の文芸」を楽しんでいる。

ブラジル連句の活動は、ブラジルハイカイにおける日本の俳句文化の「座の文芸」的な側面の理解・継承に貢献していると思われる。その点にブラジル連句の意義があるのではないかと考える。グレミオ・ハイカイ・イペー以前のブラジルハイカイでは、ハイカイは詩と同じく個人の創作として扱われ、限られた作者がハイカイ集を出版した。しかしグレミオ・ハイカイ・イペーでは、「グレミオ」(グループ、同好会)の形で、日本の俳句結社と同じように季語を研究し毎月句会を開催した。さらに連句会が座の文芸の楽しさを理解する役割を果たしたのではないだろうか。「座の文芸」という文学のあり方が、日本語のブラジル連句からポルトガル語のブラジル「レンク」に継承され、グレミオ・ハイカイ・イペーの活動理念を支える柱の一つとなったのではないかとと思われる。

ブラジルハイカイの「ハイカイ」は、俳句とほぼ同義であったが、恆河は本来の意味での俳諧精神、即ち「座の文学」性を、連句を通してブラジルハイカイに伝えようとしていたのかもしれない。

5 おわりに

本論文では、増田恆河のブラジルでの連句活動について、日本語・ポルトガル語両言語での活動の概要をまとめ、その意義について検討してきた。連句の「座の文学」としての表現性は、トランスリンガル・トランスカルチュラルな文学に親和性が高いことが指摘できる。また、ブラジルでの連句活動は、連句単独ではなくブラジルの俳句・ハイカイと密接に関わっている。日本を離れているからこそ、俳句の源流・オリジナルである俳諧の拠り所として、つまりオーセンティシティを目指して連句活動が行われたと思われる。

今後の課題としては、増田恆河が亡くなった後のブラジル連句についての調査、特に恆河が将来性を感じていたポルトガル語連句の現状を明らかにすることが挙げられる。また、恆河がこだわっていた日系俳句・ブラジルハイカイにおける季語の問題について、連句での季語を日

本語・ポルトガル語両面で分析することも必要である。

俳句の国際化ほどではないが、連詩を含めた連句も世界各地で行われている。連句の国際化、特に連句という詩型の可能性を検討する上でも、増田恆河のブラジルにおける連句活動は大きな意義があったのではないだろうか。

【資料】ポルトガル語歌仙「秋暑し」の巻

GRUPO DE RENKU CALEIDOSCÓPIO - Fundado em 22.08.93 KASEN - UM OUTONO QUENTE - Composto entre abril e outubro de 1994		
1. Um outono quente: gente anda sem paletó na rua ou no ônibus Goga	13. P'ra eles, tudo é festa... roçando nas folhas álacre chilreio Douglas	25. Nem filme, nem sonho O passado que retorna Questão de segundos Teruko
2. O tráfego escoo lento entre flores de paineira Teruko	14. Bóia a lua envolta em tule No límpido céu de inverno Fanny	26. Na calmaria da noite, Súbito ouve-se um trovão Alberto
3. Quando a chuva pára por uma fresta nas nuvens surge a lua cheia Franchetti	15. Acende-se então No seu pisca-pisca tímido A primeira estrela Alberto	27. Do meio do aquário Pula o peixinho assustado Saltita no chão Estela
4. Enquanto vou para casa contorno as poças de lama Francisco	16. Alegremnte nos muros Gatos fazem serenatas Hazel	28. Guri gostou da conversa Porque é Dia da Mentira Goga
5. Na mesa de centro as pequenas violetas Tiro os meus sapatos Zuleika	17. Na velha alameda, Adornada pela FLOR Caminho em silêncio Edson	29. Luar no quintal Aponta-me um estilingue Cai uma goiaba! Clície
6. A borboleta desfila na vidraça transparente Hazel	18. E sinto leve saudade da primavera que passa Douglas	30. Não fosse a luz do relâmpago Estaria machucado Goga
7. Pipas esvoaçam Por linhas quase invisíveis Entre os fios elétricos Zuleika	19. Rola pela face Como bolinha de gude Lágrima furtiva Estela	31. A quietude morna Caleidoscopicamente Coração festeja Teruko
8. Maria vai recolhendo Roupas secas do varal Francisco	20. Fantástico gol marcado Aplausos dos torcedores Hazel	32. Dedilhando o violão Lembro o meu primeiro amor Teruko
9. Tremula a bandeira Semi-hastecada a lembrar O herói tão querido Edson	21. Campo improvisado Na pobre periferia Calções desbotados Fanny	33. Lá atrás da igreja Um doce beijo roubado Meio à escuridão Edson
10. Uma troca muito injusta A medalha pela vida Izo	22. Um vento frio encrespava As águas do rio Tieté... Douglas	34. Rezando a missa das onze Ela evoca Santo Antônio Alberto
11. Sob o sol ardente A passeata de operários Os guardas atentos Zuleika	23. Apitando parte Ao noroeste distante Cavalo de aço Hazel	35. Reunião de haikai: Imagens da minha terra No ramo da FLOR Clície
12. Pardais vão de um lado a outro Como alegres vagabundos Zuleika	24. Vesti uma saia antiga Entrei no túnel do tempo Estela	36. Longe, canta um bem-te-vi Aqui, sinto o bem me quer... Clície

【参考文献】

- 白石佳和「季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティについての考察—ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為を例に—」(『人間社会環境研究』42、2021年9月(2021a))
- 白石佳和「言語文化教育としての活動型文学「座の文学」の系譜をめぐって」(『言語文化研究』19、2021年12月(2021b))
- 日比嘉高「移民文学の現在地—温又柔の描く女系の〈トランス・ランゲージング〉—」(『日本文学』2021年10月)
- 細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ—日本語の長い旅 [歴史]』(2012年 みすず書房)
- 細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅱ—日本語の長い旅 [評論]』(2013年 みすず書房)
- 増田恆河『ブラジル連句の歩み』(1997年 出版社不明)
- 水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷』(2013年 風間書房)

注

1. 連句に関する先行研究での言及は、細川(2013)に、「日系移民の句会が消えた後にしぶとく残るのは、彼らのハイカイ、レンク(連句)であろう」と述べている箇所のみである。
2. 増田恆河『ブラジル連句の歩み』1997年刊。出版社は不明で、私家版と思われる。ブラジル・サンパウロで刊行。内容は、前半にブラジル連句研究会の発足の経緯とブラジル連句独自の式目の説明があり、後半に1982年から1997年の連句作品約百巻がある。なお以下、『ブラジル連句の歩み』(二重鉤括弧)は書籍を、「ブラジル連句の歩み」(一重鉤括弧)は『雪』の連載をさす。
3. 133(1988年10月)号、135(1988年12月)号、137～141(1989年2～6月)号に掲載。
4. 「巻」は、本の巻数ではなく連句作品を数えるときの単位。例えば、歌仙三十六句を一巻と数える。また、連句を創作することを連句を「巻く」という。
5. 増田(1997)には、p.2「連句への憧れ」の部分が新たに加わっているほか、『雪』掲載記事との異同はほとんどない。
6. 谷地海紅氏は本名快一、村松紅花(友次)と同じ大学所属。東洋大学大学院博士課程満期退学(1980)、1997年東洋大学短期大学教授、2000年東洋大学文学部教授。近世文学(蕪村研究)の研究者である。
7. この二つの資料以外に、『第13回国民文化祭・おおいだ98「文芸祭・連句大会」入選作品集』(1998年、佐伯印刷)に受賞・入選した4つの半歌仙が確認できる。
8. ブラジルでは12月は夏。
9. 24句目はアリアンサの弓場農場をふまえた付合。24の前の23句目は「開拓や新しき村つくるべく」とある。これを弓場農場とみなし、主な生産物の一つだったゴヤバと、弓場農場で盛んな芸術活動の一つ「ユバ・バレエ団」のひとこまを詠む。
10. ブラジルの連句がブラジルと日系人のルーツである日本を往還しつつ世界が展開する点については、生田慶穂氏からご教示いただいた(生田慶穂氏発表「『ブラジル連句のあゆみ』について—式目運用を中心に—」於:ブラジル国際俳句研究会第七回例会 2021年8月29日)
11. 歌仙「春月や」の巻。発句「春月や宿望の地へ赴かん 恆河」。恆河、早苗、都由子、和栄、

- つるえ、ザビアの六吟。前書きに「恆河転宅送別興行」とある。1998年10月26日首
1999年1月25日尾)
12. 中心メンバーであった千本木渙子と小堀えみは1995年に死去。
 13. 日本文化を紹介するポルトガル語雑誌『PORTAL (ポルタル、鳥居の意)』の編集長フランシスコ半田を中心とした、有季ブラジルハイカイのグループ。これまで重視されてこなかった季語を研究し、日本の伝統俳句の考え方をブラジルハイカイ(ポルトガル語の俳句)に取り入れた。季題をもとにした句会も同時に行われた。
 14. Suzuki Teiichi, *RENGA E HAIKAI*, estudos japonês(1)91-125, Pós-graduação em Língua, Literatura e Cultura Japonesa da USP,1979.
 15. ニテロイから連句会場のあったサンパウロまで四百数十キロある。
 16. 『ブラジル連句の歩み』には、「新自他場論」の章があり、人情自の句をA、人情他の句をB、自にも他にもなる句をCなどと、句の種類を記号で分類し、観音開きや輪廻などの連句の障り(ルール違反)を避ける恆河独自の工夫について記されている。

中矢温氏に文献翻訳のご協力を、生田慶穂氏に有益なご助言をいただきました。また、サンパウロ人文科学研究所(Centro de Estudos Nipo-Brasileiros)、エウニセ・スエナガ氏、宇野恭子氏、北野真知子氏、密田蓉子氏に研究資料の提供や有益なご助言をいただきました。感謝申し上げます。

なお、本論文は、JSPS科学研究費補助金(基盤研究(B)、課題番号21H00520)の助成を受けたものです。